

最終改訂年月 : 17 February 2004

背景: リンパ浮腫は慢性の進行性病態であり、感染性／炎症性エピソード(AIE)に対する最適な管理法は定まっておらず、議論の多い分野のひとつである。

目的: 抗生物質／抗炎症薬の予防的投与により、リンパ浮腫の患者におけるAIEの発生数と重症度が軽減されるかどうか判断する。

検索戦略: 2003年9月のCochrane Breast Cancer Group register、Cochrane Central Register of Controlled Trials(Cochrane Library、2003年第4号)、CINAHL、MEDLINE、PASCAL、SIGLE、UnCover、British Lymphology Societyの作成による参考文献一覧表、National Research Register(NRR)およびInternational Society of Lymphology議事録を検索した。

選択基準: 抗生物質または抗炎症薬をプラセボ(理学療法を併用した場合または併用しない場合)と比較したランダム化比較試験を選択した。

データ収集分析: 盲検化された2名のレビューアが、採用した試験の適格性を確認した。質に関する基準のチェックリストを用いて、各レビューアが別々に論文をふるい分けた。データ抽出書式を用いて、2名のレビューアが適格試験からデータを抽出した。

主な結果: 4つの試験(ランダム化患者364名)を採用した。2つの試験は、AIEの予防に対する集中的理学療法とセレンウムまたはプラセボ併用の効果を研究しており、他の2つの試験は、adenolymphangitis(ADL)の予防治療としてイベルメクチン、ジエチカルバマジン(DEC)(いずれも抗線虫薬)およびペニシリンの効果をプラセボと比較検討していた。2つのセレンウム試験ではいずれも、試験期間に治療群には炎症性エピソードの報告がなかったが、2つの試験のプラセボ群にはそれぞれ1例の感染例が報告されていた。3カ月の追跡期間には、このほかにそれぞれ7例と14例の感染例が治療を必要としていた。1つの抗線虫薬試験では、治療を行った年に全群併せて127件のADLエピソードが報告されていた(これに比べ治療の前年では684件)。追跡期間の1年には228件のADLエピソードが報告されていたが、得られた所見は有意ではなかった。浮腫の重症度とADLエピソードの発生頻度との間に関連性(link)は認められなかった。エピソードの増加と雨の多い季節との間に有意な関連性が認められた。ペニシリンの治療後には炎症性エピソードの平均発生数が4.6例から0.5例に減少しており、追跡期間の終わりには1.9例に増加していた。

レビューア見解: 適切に実施されたランダム化比較試験がない現状では、リンパ浮腫におけるAIE予防に対してセレンウムが有効かどうか、未だ結論に達していない。抗線虫薬は、フィラリア性リンパ浮腫におけるADLエピソードを減少させていないようである。ペニシリンは、フット・ケアと併用するとき、ADLの有意な減少に寄与しているようである。フット・ケアの重要性を推奨すべきであり、これは乳癌治療後の腕のケアにも当てはまると考えられる。これらの介入法の有効性を立証するには、適切に実施された試験が必要である。

Citation: Badger C, Preston N, Seers K, Mortimer P. Antibiotics / anti-inflammatories for reducing acute inflammatory episodes in lymphoedema of the limbs. The Cochrane Database of Systematic Reviews 2004, Issue 2. Art. No.: CD003143. DOI: 10.1002/14651858.CD003143.pub2.

Clib issue No.: 2005 issue 4

CRG名: Breast Cancer

* ご注意: この日本語訳は、試験的翻訳(Draft翻訳)版として公開するものであり、翻訳の正確さや質が保証されたものではありません。訳語の間違いなどお気づきの点がございましたら、Minds事務局までご連絡下さい。また、この試験的翻訳版はコクラン・ライブラリ2005年issue 4に掲載されたレビュー・アブストラクトの翻訳です。コクラン・ライブラリは年4回改定版が発行されていますので、ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認下さい。